

LIBRA SQUARE

Book

最近、おもしろかった本

『病院で死ぬということ』

山崎章郎 著 文春文庫 530円（税込）

“いかに自分らしい人生を全うするか” 終末期医療に携わる医師からの問題提起

実に重たいテーマを扱った1冊であるため、「おもしろかった本」として紹介することには、正直に言うためらいがある。ちょうど、富山県のある病院で、外科医が複数の末期状態の患者に対して人工呼吸器を外したことについて問題にされていたときに、この1冊が目にとまった。

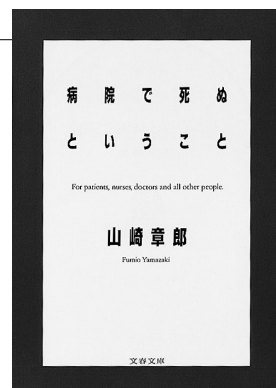
誰もが、いずれは両親をはじめ愛する家族の最期を看取しなければならないだろうし、いずれは自分も最期の時を迎えることになる。「どのような最期を迎えるのか」は、できれば考えたくはないし、あるいは、元気なうちには考えることなどできない問題であるのかもしれない。しかし、いざそのときに臨んでは、自己の意思を伝えることすらできないかもしれない。また、自己の意思を聞き入れてもらえないかもしれない。

現代の終末期医療の問題点に直面している医師として、多くの末期癌患者たちの死を看取ってきた著者が、末期癌患者の延命・癌の告知・ホスピスの問題を提起している。11人の末期癌患者が、どのような最期の時を迎えたのか、比較的短いエピソードがならべられており、時間のあるときに読み進めることができた。

多分に医師である著者の主観によって事実が創られ、語られていると感じられる部分もないではない。しかし、他方、現場で死にゆく人々の心の葛藤を目の当たりにした著者の生々しい描写が直に伝わってくる。あるときは「病院での死」の暗く冷たい現実を目の当たりにさせられて辛い気分になり、またあるときは、末期癌という現実を受け止めつつ、家族と共に残された時間を精一杯生きて誇り高い「最期の時」を迎えられたという心温まるエピソードに目頭が熱くなる。ある患者は、末期癌と告知されて大きなショックを受けパニック状態となったが、過剰医療や無益な延命措置から解放され、周囲の暖かい支えを受けて自己の最後の日々に納得し、「先生、ありがとうね」との言葉を残し、自らの死を受け容れていった。

死の迎え方についてまで医療者側への「あなた任せ」になってしまっている現実の中で、いかに自分らしい人生を全うするか、その幕の下ろし方について考えさせられるいい機会となった。

（会員 保木野 秀明）



Cinema 心に残る映画

『アタック・ナンバーハーフ』

2000年／タイ／ユンユット・トンコントーン監督作品

実話に基づくゲイをめぐるコメディ いわれない差別への厳しい批判, 根底に

私が紹介する映画は「アタック・ナンバーハーフ」である。タイトルから、内容を推測できるだろうか。ゲイのバレーボール選手たちが国体を目指す、タイのコメディである。ちなみに原題は「鋼鉄の淑女（ゲイチームの愛称）」であるが、日本人には上記邦題は好訳であろう。

県代表のバレーボール・チームで選手の選抜が行なわれ、ゲイのジュンとモンが選ばれてしまう。反発した選手たちは補欠のチャイ1人を除き代表を辞退した。仕方なく、バレーのできるゲイの友人を誘うことになり、チャイ以外はすべてゲイというチームが誕生してしまった。映画は、ゲイの選手とノーマルのチャイとの対立と和解、ライバルチームとの死闘、ゲイに反発する国体運営者サイドの嫌がらせと、わかりやすい設定にのって進行し、最後に国体決勝を経て大団円となる。

この話、あまりにできすぎているが、実は1996年のタイ国体で優勝したゲイチームの実話をもとにしている。それ

も、80%実話であり相当忠実に再現されたというから、本当に驚いた。興味がある方は是非DVDで見てもらいたい。特典として、本物のゲイ選手の試合映像が収録されており、強烈なアタックを決める屈強なゲイを目にすることができる。

もう1つ、この映画の根底には、一貫して、ゲイに対するいわれない差別への厳しい批判が込められている。タイでもゲイに対する不平等な仕打ちがまかり通っている現実を突きつけられ、ただおもしろいだけでなく考えさせられてしまう点もある。

なお、DVDを借りられる方は、日本未公開シーンもおまけで付いているので、全シーンを見てほしい。本編では意味のわからなかったこともつながるようになっている。すでに続編も映画化されDVDも出ており、それも50%実話とのことであるから、機会があれば借りてみようと思っている。

(会員 桑田 英隆)

『アタック・ナンバーハーフ』
レンタル・発売中
価格：4935円（税込）
発売元：クロックワークス、
角川書店
販売元：クロックワークス

